

番つて便利な言葉ね

無能とされた放置嫁は、  
薬師になつておひとり様を満喫する

フィル

グリーンバレー王国  
王太子。  
アーネストの  
幼なじみ。

クロエ

魔石関連の権利を  
握っているため、  
いろいろな無理を通してきた  
大公家の令嬢。  
アーネストのことが好き。

ガイツ

魔法を封じられていた  
奴隷の魔法士。  
サミーの力で魔法が  
再び使えるようになる。

レオン

奴隷として売られていた  
狼の獣人。連れていた  
犬と共にサミーに  
護衛として買われる。

アーネスト

サミーの番として  
選ばれた公爵。  
王家の命令で他国に  
いたため、番のことを  
迎えに行けなかった。

サミー(雅美)

婚約者に捨てられたと  
思ったら、番として異世界に  
召喚された日本人女性。  
なんの能力も魔力もないと  
言われたが、  
そんなことはなく——？

???

ある日、目覚めると  
サミーたちと  
一緒にいた  
この少年は——？

## 目次

番って便利な言葉ね

無能とされた放置嫁は、  
薬師になっておひとり様を満喫する

番って便利な言葉ね 番外編集

番って便利な言葉ね

無能とされた放置嫁は、  
薬師になつておひとり様を満喫する

「見てわかるだろう。僕は美咲と結婚する」

喫茶店の向かいの席に座る光一さんの言葉が、うまく頭に入ってこない。

言葉は確かに聞き取れたし、意味も理解できた。だけど……だけど……そんな！

「どういうこと？」と言った声は自分のものと思えないほど、しゃがれていた。

「相変わらず、鈍いなあ。雅美。おまえとはお仕舞い、別れる。てか、始まつてもないか。僕はここにいる美咲と結婚するんだ」

「ごめんなさい。塚本先輩。先輩に付きまといわれて困っている光一さんを見かねて」

光一さんの隣に座っている美咲ちゃんがしおらしい声で言った。

彼女の言葉で、いろいろな思いが湧きあがってくる。

いつもあなたの仕事のフォローをしたのはわたしだったよね、美咲ちゃん。そう言えば、わたしが手伝ったことは隠していた気がする。だから褒められるのはいつも美咲ちゃんだけだったのか……

それに付きまといていたのは光一さんの方。いつもうちに入り浸っていたのはあなたの方だった

けど。

「わかりました」と呟くとわたしは立ち上がり、伝票を置いたまま店を出た。

最初で最後のささやかな仕返しだ。

コーヒー代、一度くらいは払って頂戴。

わたし、塚本雅美は喫茶店を出て、会社に戻った。溜まっていた有給を取る申請をし、そのまま退社した。家に帰ると、大きめのトランクに身の回りの物を詰めていく。光一さんの思い出があるこの部屋を引き払うためだ。

わたしには両親も祖父母もいない。未練はない。どこにでも行ける。不動産屋に電話をかけ、家具も家電も全て処分する手配をした。

なんとか全ての手続きを終え、家の鍵を不動産屋に返して店を出る。その瞬間、白い光に包まれ、なにも見えなくなった。

なにが爆発したの？ と思ったのが最後だった。

しばらくしても、痛みもなにも襲ってこない。ただまわりが騒がしかった。そっと目を開けてみると、丸い輪のなかにわたしぐらいの年齢の女性が何人か立っている。そして少し離れたところから、見慣れない服装の人たちがわたしたちを見ていた。

「歓迎いたします。番の皆様。まずは説明いたします。こちらへ」

そう言った神官らしき人について行くしかなかった。だっていつのまにか、腰に剣を下げた人たちに囲まれていたから……

促されるまま大きな丸いテーブルに座った女性はわたしを含めて、十人いた。

「何、この世界。文明が遅れているよね。荷物はなにもない。バッグもないしスマホもない」

「ほんと、スマホがポケットに入っていたはずだけじゃないわね」

「やだわ。今日発売日のゲームが届くの」

「冷凍のお肉、冷蔵庫に移したのに」

「アップルパイを焼いて、粗熱をとっていたのよ」

「奴隷にでもするつもりかしら、剣なんか下げて」

皆動揺しているせいかな、それぞれの不安を口にする。

声を聞いているうちに、落ち着いていたはずの気持ちぐらついていた。

わたしも急に不安になってきた。

心を落ち着かせようと、さっきまで手にしていたトランクのことを思った。不動産屋さんの前に落ちているであろうわたしのトランク。

あれを見た人は、なにを思うのかしら？ 誘拐とか神隠し扱い？

というか、さっき言った『番』ってなに？ わたしたちどうなってしまうの？

そこに、神官見習いって感じの若い男の子がワゴンを押してやってくると、お茶とお菓子をそれぞれの前に置いた。

お茶からはちよつと風変わりな匂いがある。喉が渴いていたので、おそるおそる一口飲んでみた。あれ？ なんだか頭がぼんやりするような……

不思議とさっきまでの不安やいら立ちが治まってきた。お菓子も美味しい。

和んでいると神官がわたしたちの前に立って、説明を始めた。

「ようこそ、グリーンバレー王国へ。皆さんは番としてこの国に招かれました。歓迎いたします。

番というのはこの国の者の伴侶ということで、大切に……」

そこで咳払いをして、神官は続けた。

「国をあげて、一族をあげて大切にいたします。みなさんは伴侶と幸せに暮らして行けます。伴侶は永遠の愛を捧げます」

そうなんだ。永遠に愛してもらえて大事にされる……この世界に来てよかったと思った。

お茶をぐびりと飲むたびに、安心感が増していく。このお茶にはリラックス効果があるのかもしれない。

まわりの皆も美味しそうに飲んでいる。

「ねえ永遠に愛してくれるって凄いいよね」と隣の女性から話しかけられた。

「うん、嬉しいよね」

「でも、どんな人かな？ かつこいいと最高だけど」

今度は反対側の子が話に入ってきた。

「そうだね。相手を選ぶのかな？」

雑談を始めたわたしたちを見て、神官が口を開く。

「みなさんには明日からこの世界のことを学んでいただきます。今日はお部屋の準備ができるまで、ここでご歓談下さい。お茶もお菓子もたくさん召し上がって下さいね」

神官はそう挨拶すると部屋を出て行った。

それからわたしたちは、自己紹介しあって、わいわいとお喋りして伴侶や、これからの生活に思いを馳せてすごした。

やがて、女性たちが迎えにやってきた。一人一人に侍女がつくらしい。想像以上の好待遇でこれからの生活がさらに楽しみになる。

翌日、目が覚めたわたしは、知らない天井を見上げた。ああ、ここは本当に前にいた世界じゃないんだ。

昨晚用意された寝巻きは寝るのもつたいのないような上等な物だった。今朝はその上に、用意されていたガウンを羽織った。これも素敵で誰かに見せびらかしたくなる。

窓のカーテンを開けると、部屋が一気に明るくなった。

部屋は三階か四階くらいの高さで、花がいっぱいの庭が見下ろせる。

そこにノックの音がした。わたしの「どうぞ」という返事の後にドアが開き、侍女のアンナが入ってくる。

お茶を載せたお盆を持っていた。

「朝の支度はおまかせ下さい。支度ができましたらお食事が参ります」

アンナの言葉にうなずくと、すぐにドレッサーの前に座らされ、髪を整えられた。

最近忙しくて、伸びっぱなしだった髪を丁寧に編み込んでまとめてくれる。そうして見事な金細工の髪留めを着けてくれた。

用意された服は可愛すぎて、着るのはちょっと照れくさい。だけど、これしかないので黙って着替えさせてもらった。

鏡に映った自分は、それなりに綺麗で可愛く見える。

こういう服もありだな。やはりここに来られてよかった。

食事をすませて、案内された先には、もう番の何人かが集まっていた。

皆の着ている服は微妙に違っているが、どれも上等そうに見える。

歓迎されているのは確かなようだ。お互いを褒めてはしゃいでいると、教師がやってきて、お茶を飲みながら、和やかな雰囲気で講義が始まった。

この国の名前は、グリーンバレー王国。エルンスト家という王族が治めているらしい。わたしたちのいるここは王都とのことだ。

前にいた世界と同じようにこの世界にも国境があり、グリーンバレー王国はルミナス王国という小さな国と、そして広大なイースト皇国と接しているらしい。そしてこの三国の仲は良好だという良かったわ。どこかで読んだ小説みたいに聖女なんて言われて戦争に駆り出されるなんて嫌だも  
んね。



さらに、番とはなにか詳しく教えてくれた。

「異世界からやってきた番は、この世界の相手、つまり夫にとって、運命によって定められた最高に相性の良い方なのです。夫に幸福をもたらすと言われています。出世したり、商売が上手くいってお金持ちになったり。昔、農場主の番は、栽培方法を提案して、その農園は利益をあげました。そしてそのやり方は、今や全世界に広まっております。番は世界を変えるとされるのはこういうことがあるからです」

わたしたちは、その話を聞きながらお互いに目を合わせて、うなずきあった。

あれね、異世界転生ものでマヨネーズを作ったら爆発的に人気になったり、リバーシを作ったら大ブームになったりする類ね。

そして、なんと、この世界には魔法や魔力が存在するようだ。

説明によると、人には必ず魔力が備わっていて、魔力の高い人はより強い魔法が使えるとか。

よく小説に出てくる火や水といった属性の概念はなさそうだ。

また、その人にしか使えない固有の魔法があり、それを能力というのだそう。

「番には必ず能力があります。その能力で夫の能力をあげると言われています。そういうこともあって、番は愛され、大切にされるのです」

ということとは、わたしにもなにか能力が芽生えるのかな？ それは楽しみかもしれない。

それから護衛の騎士についての説明があった。剣を持っている人は騎士とか兵士とかに分けられると習ったけど、あまり理解できなかった。

それより、驚いたことに騎士の何人かは耳が…：獣耳だったのだ。

その中の一人が前に出て、説明してくれる。

「わたしは犬獣人です。こちらは猫獣人になります。一口に獣人といっても、それぞれ異なる特徴があります。耳や尻尾の有無、毛の色や目の色は、髪の色と同じように先祖から受け継いだものです。両親が人間の耳をしていても、先祖に獣人がいれば、世代を経て獣人の特徴が現れることがあります。数世代ぶりに現れることもありますので、生まれるまでわかりません」

本当に小説の中みたいだ。皆も同じ気持ちなのか、身を乗り出して聞いている。

「尻尾についても同様です。わたしには尻尾がありませんが、こちらの猫獣人には尻尾があります。また、獣人には獣の姿になれる者となれない者がいます。わたしは犬の姿になりますが、こちらの猫獣人はなれません。幼い頃から人として育てられれば、獣の姿で生まれた者でも、すぐに人の形を取れるようになります。獣として扱われれば、人の形を取るのが難しくなります。これは獣人の間では広く知られた常識です」

へえ、育て方でそんなに変わるものなのか。お茶を飲みながら、その言葉を頭の中で繰り返した。彼らが去って行った後、わたしたちの話題はもちろん獣人についてだ。

「番は獣人希望だわ。耳と尻尾も欲しいわ。ブラシをかけてあげたい」

「おなじく、我が子に尻尾があるのも素敵よね」

「それぞれ、ここに来てよかったわぁ」

それから、この世界の常識を教わった。

月日の数え方やお金の単位にはじまり、実際の品物を見せてくれて、その値段まで。

もしわたしの番が商人だったら、帳簿をつける手伝いは必要だろう。この世界にはスマホもパソコンもないから、難しいことのように感じてしまう。

わたしはこれからの生活に備えて帳簿のつけ方を知りたいと思い、アンナに相談したら図書館に行くことを勧められた。

言葉はわかるし、教えてもらったおかげでこの世界の文字も読める。時間がある時は、図書館で勉強するようになった。

図書館に行くときもアンナは同行してくれ、こまめにお茶を用意してくれる。

コーヒーは飲めないけど、このお茶があるからいいや。

そうやってすごしていたある日、鑑定の魔法を使える魔法士——つまり鑑定士がやってきた。

鑑定士は魔力が相当高いと本に書いてあった。そんな人に会えるなんて、とても楽しみだ。わたしたちはお茶を飲みつつ名前が呼ばれるのを待つ。自分がどんな能力を持っているのか期待に胸が膨らんだ。

順番になり、緊張しながら魔法士の前に座る。魔法士はしばらくわたしを見ていたが、やがて不機嫌な顔になった。

「あなたには魔力も能力もありません。なんにも見えません」

「え？」

吐き捨てるように言われ、わたしは座ったまま固まってしまった。

「下がらせて、不愉快だ」

あわてて神官が近寄ってくると、わたしの腕を掴んで立たせた。

そのままわたしは、部屋から外に連れ出される。

アンナが呼ばれて、わたしは部屋に連れていかれた。廊下を歩いている間も、涙が止まらない。

部屋に戻りベッドに座ると、涙を拭った。

「泣き止んだ頃、また来ます」

それだけ言うと、アンナは出て行った。

冷たいんじゃない？ 主人が泣いているのよ……

能力がなによ。番はきつと愛してくれるわ。

それにわたしが泣いたのはあの鑑定士の目が怖かったからよ。人を睨みつけて……もう、二度と会いたくないわ。

翌日、講義室に行くとき全員がわたしを見てはつとまった。

いつもつるんでお喋りしていた仲間が、こちらを見ないようにして笑っている。自分たちだけで、

お茶を飲んでいる。

わたしは黙って、離れた場所に座った。

窓の外を見るふりをして、視線を逸らす。笑われているのはわかっていた。だけど、泣くつもりはない。昨日もう泣いたから。

そこに神官がやってきて、今日の予定を告げる。

「みなさん、能力の鑑定が済みましたね。今日からそれぞれの能力に合った講義を受けてもらいます」

名簿を見ながらそれぞれの講義室を伝えていく。

「名前を呼ばれなかった方は、図書館なり、庭の散歩なり好きに自習して下さい」

わたしを見ながらそう言うと、神官は部屋を出て行く。

昨日まで仲間だった皆が、くすくす笑い出した。

わたしは、いたたまれず講義室を飛び出した。

それからわたしは毎日、図書館に通った。お茶を飲みながら本を読む——それだけが、今のわたしの日課だ。

ふと、皆はどんな能力があったのだろうかという気になり、異世界人の能力についての本を探してみることにした。

本によると、能力は思っていたより地味なものが多い。

天気がわかる能力——精度を上げれば農業に使えるかもしれないが、洗濯に便利な程度だろう。

手を触れずにドアを開閉する能力——誰かをびっくりさせくらいいしか使い道が思い浮かばない。

物を少しだけ動かせる能力——肖像画を傾けたり、家具を揺らしたりしてホラーハウスを作るにはいいかもしれない。

果物の食べごろがわかる能力——果物専門店なら成功できるかも？

なんだか、わたしが思い描いていた能力とはずいぶん違うみたい。能力のないわたしが言えた義理じゃないけれど……

魔法に期待できないならと錬金術についての本を探した。

錬金術の入門書を見つけて、部屋に持ち帰りページをめくる。

ゲームによく出てくるポーションは、錬金術で作るものだったのか……役に立つかどうかかわからない知識がまたひとつ増えた。

そうだ。明日は庭の薬草を見に行こう。腐ってもここは神殿、薬草くらいは栽培しているはずだ。少し気持ちが上向いた。やることが見つかる、不思議と落ち着く。

その夜、アンナが食事を持ってきた。

最近はめっきり冷たくなって、こまめに用意してくれていたお茶も出なくなった。だから水を飲むために、自分で水差しを持って行って汲んでくる。

それにころなしか食事が粗末になってきた気がする。

食えることくらいしか楽しみがないから、食事の質に敏感なのだ。

翌日、薬草園の場所を教えてもらい行ってみると、年配の神官がやってきた。

「おや、こんな所でどうしましたか？ 異世界から来た番さんですね」

「能力がないと判定されました、好きな所で自習していると言われましたので、散歩してきました。

これが薬草ですか？」

「そうです、薬草です。ちょうどポーションを作ろうと取りに来たところで……よければポーション

の作り方を教えますよ。なに、簡単ですよ」

ポーションの作り方は、本に書いてある通りで、実際にやってみても簡単だった。

材料になる薬草を分量通りに鍋で煮出す、それだけだ。

「魔力を込めると品質が上がって、高く売れますよ」

神官はさらにそう教えてくれた。

つまり、同じ材料でも作る人によって出来が変わる、腕の差が出るということだ。

神官が錬金釜がまに薬草を二つほど入れ、水を注いだ。

それを火にかけながら、わたしが木の棒でかき混ぜる。

混ぜる時に魔力を込められるらしいが、わたしには魔力がないのでそれはできない。

かわりに「美味しくなれ。美味しくなれ」と念じてみて、料理じゃないと気づき「よく効く

薬になれ。よく効く薬になれ」と言い直した。

やってみると思いのほか面白い。そしてなんとなく上手くいつてる気がする。

「ほう、なかなか筋がいいですね。いろいろ工夫してみるといいでしょう。よければ使わなくなった道具を差し上げましょう」

神官は隅で埃をかぶっていた道具一式のほかにわたしが作ったポーションを瓶に詰めて渡してくれた。さらに絵が描いてある紙切れを一枚、手渡される。

「これが持ち出し許可証です。これがないと神殿の外に持ち出せませんからね」

わたしは神官にお礼を言って、それを受け取った。

錬金釜に秤はかりや、木の棒などをまとめて入れ、時々地面に置いて手を休めながら、道具を部屋へ運んだ。廊下で何人かの使用人とすれ違ったが、誰も話しかけたりしなかった。それでいい。今は道具のことで考えていたかった。

浴室できれいに洗ってみると、錬金釜は重厚な光を放ち、他の道具もそれなりに高級そうに見える。

明日は図書館でもっと勉強しようか、それともあの神官にまた会いに行こうか。そんなことを考えながらずっと錬金釜を磨いていた。

その後、あの神官には会えなかったが、図書館通いは続けて、様々なレシピを書き写した。そんなある日、わたしたちは講義室に集められた。

「皆さんがこの世界に来て、早一月です。明日、番が迎えに来ます。ここに来た時の服を着て準備して下さい。最初と同じ状態で出て行って下さい。なにも持ち出せません」

一か月。そんなに経っていたのか。時間の感覚が狂っている。だけど、明日。ついに明日だ。

「えー？」「まさか」「そんなー」と声上がる。

「ご安心ください、番の皆様はきちんと準備してやってきます。この物を着ていると、やきもちを焼かれて面倒なことになりますので」

神官の言葉で、皆一様に表情がほぐれた。

そうよ、永遠の愛の相手だもの。全部お任せするわ。

やっと番に会えるんだ。明日への高揚感で大きく息を吸って、ゆっくり吐き出す。

早くこの憂鬱ゆううつな場所から出て行きたい。

部屋へ戻る途中、自分の足取りが弾んでいるのに気づいた。

明日、番に会える。何度も頭の中で繰り返す。どんな人だろう。怖い人じゃなければいい。優しければなお嬉しい。かっこよかったら最高だ。

翌日、わたしは待合室になっているホールに、錬金術の道具を一生懸命運んだ。これは許可証があるから持ち出せるのだ。

侍女のアンナは見ていてだけで手伝おうとしない。国を挙げて番を大事にするって嘘なのね。だけどわたしの番は、大事にしてくれるはず。それだけを信じて重い道具を運び続けた。

運び終わると、いつもの神官が挨拶を始めた。

「今日は皆さんの番の相手がいらっしやいます。男性側は会えば誰が自分の番かわかります。男性の番は今日の日お待ち望んでいました。挨拶はこのへんにして、さっそくお入りいただきますよ」

ドアが開いた途端、人がどっと入ってきた。皆かっこいい。

わたしの番はどこ？ 早く来て。

「やっと会えました」と言うなりお姫様だっこをして、嬉しそうに尻尾を揺らしている獣人。

ひざまずいて手に口づけする金髪イケメンなどなど。

あつという間に、部屋はわたし一人になった。どうということ？ 錬金釜の隣で、わたしはただ立

ち尽くす。

俯くとこの世界に來た日に着ていたボレロつきワンピースの裾が目に入った。少しほつれてしまつたようだ。

そこへ、きつい顔立ちの美人が数人の使用人を従えて入つてきた。

「この子が我が家の番なのね。うちには不要だけど神託には逆らえないわね。連れて帰ります」わたしではなく神官に向けての言葉だつた。

「そうなりますね。公爵夫人。この番はなんと能力がなかつたんですよ。前代未聞です。令息が不要と判断なさつたのは炯眼けげんです。さすがですね」

二人の会話が頭の中をぐるぐると巡り、涙がにじんでくる。

「この荷物はどういふこと？」

「許可証がありますので、持つていつてください」

夫人の問いかけに神官が申し訳なさそうに答えた。

「迷惑ね。仕方ないわ、運んで」

従者らしき一人が、黙つてうなずき鍊金釜を持ち上げる。

「ついでらつしやい。ぐずぐずしないで」

その声に、わたしは機械的に足を動かす。

二台停まつている馬車のうちのひとつに鍊金釜と一緒に乗せられ、公爵家に向かつた。

馬車の壁を見ながら、さっきの言葉を頭の中で繰り返す。能力がなかつた。不要だと言われた。

それなのに、なぜか連れていかれる。

到着して馬車を降りると、公爵夫人の姿はすでにない。

きりつとした女性が近づいてきた。

「あなたが番とやらね。わたしは侍女長で公爵夫人付きのメリンダ。とりあえず部屋に案内します。

荷物はその鍊金釜ね」

メリンダは言い終わるなり「鍊金釜だなんて」と笑い始めた。

「自分の物は持つてるでしょ。ついてきて」

ひとしきり笑うと、さつさと歩いていく。

重い鍊金釜を抱えて、途中で二度ほど立ち止まり、やつと部屋に到着した。

部屋は暗いけれど、一応浴室とトイレもある。それだけは日本と同じくらいの設備だ。

「一応、番様ですので侍女を付けます。食事はすべて部屋で召し上がってください。皆様の邪魔にならないように……」

メリンダはそれだけ言うとお部屋を出ていった。

なによ、国をあげて大事にしますなんて大嘘じゃない！

浴室で手と顔を洗い、クローゼットと引き出しをひとつおり開けてみる。

神殿で着ていた物より粗末な物が入つていたが、まあないよりましだ。

シャワーを浴びて着替えると、本でも読みたい気分だったが、今日は外に出るのを控えて、ぼんやりと庭を眺めて時間を潰した。

わたし付きの侍女はリリーという名前で愛想こそなかったが、食事はちゃんと運んでくれた。頼めば侍女長に話を通してくれて、図書室と庭の出入りの許可もなんとか取れた。

さっそく図書室で初歩の魔法の本を読み、水と火を出す練習をしてみる。

水は割と簡単だった。手のひらの上に水を出すと、ふわりと浮かんだまま形を保っている。落とさないように意識を向けると、空中でゆらゆらと揺れながらもその場に留まった。

面白い。

試しに動かしてみると、意識した方向へすると動く。鍊金釜の上まで運んで、そつと魔法を解くと、ざあつと釜の中に落ちてあっさり満たすことができた。

火は室内では練習しづらいが、手のひらに小さな火を灯すくらいはできた。

魔法が使える。それがわかっただけで、少し気持ちが軽くなった。

ここでの暮らしは、決して快適とは言えない。だけど最低限のものは揃っている。部屋がある。食事が来る。図書室も庭も、許可さえ取れば使える。

公爵家は衣食住の最低限は保障してくれている。けれど、ここにずっといるつもりはない。

お金を貯めて出ていこう。

そのためにポーションを作つて稼ぎたいので、薬草をどうにかしなくては。

とりあえず、働こう。小説なら冒険者ギルドに行く場面だ。わたしもそれに倣つてみよう。

神殿で日常生活やお金のことを教えてもらつておいて本当に良かった。

庭をうるついていた時に見つけた塀の隙間から、外へ出る。

大通りに出て、冒険者ギルドの場所を教えてもらい、無事にたどり着くことができた。

ギルドでは本名の塚本雅美から取つて、サミーという名前で登録した。

受付のマジギーによると、冒険とは無縁の仕事もあるらしい。

お使いや掃除、帳簿付けのようなものだ。

棚に並んでいるポーションの瓶を見ると、自作のものを買い取つてくれると書いてある。

さっそく自作のポーションを売る目処が立った。

部屋に戻ると、昼食は置いてあったが、いつものお茶は見当たらない。

その代わりにあったのはただの水だった。

昼食の後、庭で薬草を摘んで、ポーションを作ろうとしたが、火がない。瓶もない。

はあ……参った。

気分転換にお風呂に入ろうとしたら、お湯が出ない。

困って使用人を探してうろろしている、侍女長に出くわした。

事情を話すと、侍女長は眉をひそめて言う。

「浴室の魔力が補充されていないだけでしょ。そもそもなに贅沢なことを言ってるの。働

かずに食べさせてもらっているくせにお風呂ですって。呆れたわ。今日の夕食は抜きよ。反省なさい」

怒った様子で去っていく背中を見送りながら、胸の中で静かに誓う。

……いつかまとめてやり返してやる。

その夜、体は水で拭いてやりすぎした。だけど、ベッドに横になってもおなかがすいて眠れない。前にいた世界、日本のことを思い出していると涙がこぼれそうになった。

あの日、不動産屋に寄る前に、コンビニで肉まんを買ったんだ。あれはあのままあちらに、置いてきたのかな？ ああ、あれがここにあつたら……なんて思っていたら――

「……えっ？」

どこからともなく肉まんが出てきた。驚いて、思わずベッドから起き上がる。

肉まん？　なんで？　それに、温かい！

いや、まずは落ち着こう。

これってよく考えたらひと月以上前の肉まんでは？

おそろおそろの匂いや中の餡あんを確認してみる。だけど、傷んでいる様子は全くなく、見れば見るほど美味しそう。

思い切つて、肉まんにかぶりつきながら考えた。

もしかして、これがわたしの能力つてこと？　そうだとしたら……

今度は「スマホ、出てきて！」と強く念じてみる。

やっぱり、スマホが出てきた。しかも充電されてる！

念じた結果出てきた温かい肉まんと充電されたスマホ。

これって、異世界転生ものの小説で言うアイテムボックスじゃないの。

念じるだけで異空間に荷物を収納・取り出しできるつてやつ。ただの入れ物より断然に機能がいい。

今は何が入っているんだろう。中身を全部確認したい……と思った瞬間、一覧表が目の前に現れた。

まずはトランク。中身はそのまま。次にバッグ。こちらの中身はこの世界に来る直前のまま。その次はコンビニの袋。中身はお茶のペットボトル、チョコレート、のど飴。あの日買ったものだ。ただし、量が増えている。

お茶は一本買ったはずが二本に。チョコレートもど飴も倍になってる！

なぜ増えているのかは、考えてもわかりそうにない。このまま受け入れよう。

肉まんは迷ったけど、全部美味しくいただいた。

今アイテムボックスに入っているものは前にいた世界から持ってきたということになる。

そうだとすると、この世界に来た瞬間から、この能力はもう芽生えていたということだ。

もちろん鑑定してもらった時も能力はあつたはず。

それをあの鑑定士め……番が迎えに来ないことを知っていて、意地悪したんだ。

いつか復讐してやる！

復讐を誓った後、ふとあることを思いつき、浴室に行く。浴室の魔石を外してアイテムボックスに入れてみた。スマホが充電できたのだから、魔石に魔力を補充できるかもしれない。うまくいかどうかはわからない。だけど、試してみる価値はある。明日、確かめてみよう。今日だけで、どれだけのことがあっただろう。番として引き取られたのに、ろくな扱いをされず、夕食まで抜かれた。だけど、アイテムボックスという能力を持っていることがわかった。それだけで十分だ。

いろいろ考えることはあつたが、眠気には勝てず、そのまま眠りに落ちてしまった。

翌朝、リリーが持ってきた食事はさらに粗末になっていた。念のため記録しておこうと、スマホを取り出して写真を撮る。

アイテムボックスから魔石を出すと、魔力が補充されていた。これでお風呂に入ることができる。朝風呂にゆっくり浸かりながら、頭の中を整理していく。

アイテムボックスに入れておいたワンピースのほつれがなおっていた。壊れた物を修繕できるのかもしれない。

図書室へ急ぎ、能力について調べた。

アイテムボックスは百人にひとりを持つ能力で、さほど珍しくはないらしい。神経質に隠す必要はなさそうだ。

ただし本の記述によれば、機能は「大きなカバン」に過ぎず、時間停止も魔力補充もできない

はず。

やっぱり隠しておいた方がよさそうだ。

さて、ギルドへ行つて仕事を探そう。

ギルドに着くと、掲示板に「ギルド物置の片付け」という依頼が出ていた。

受付のマギーに確認すると片付けというより、ゴミを捨てて部屋を空っぽにするらしい。

時間はいくらかけても構わない、町はずれのゴミ捨て場に運べばいいとのことだ。

受ける前に現場を見せてもらおうと、ギルドとは別の建物に雑多なものが山積みになっている。

武器に鎧、そしてポーションの空き瓶がとにかくたくさん。

欲しいものがあればもらっても、売ってもいいそうだ。

マギーの所へ戻り、アイテムボックスの能力で荷物をまとめて収納して運べるので、この依頼を受けるに伝えた。そして剣などの売り先を紹介してもらった。

あわせて神殿で作ったポーションを売ると、思っていたより高く売れた。そのお金でリュックと肩掛けカバンを買った。

それからは毎日、倉庫へ通つては武器や鎧を収納し、売れるものは売り、それ以外はゴミ捨て場へ運んだ。ポーションの空き瓶も後で使うために拾って集める。

いくら収納しても体調に変化はない。

街を歩いている時に古着屋を見つけ、着られそうなシャツとズボンと上着を買った。

ついでに、くたびれた服も数枚。アイテムボックスに入れておくと汚れが落ちてきれいになるの

だ。それを転売すると、思いのほかい稼ぎになる。

それからアイテムボックスから物を取り出す際に、リュックやカバンから出したように見せる練習を重ねていく。おかげでリュックやカバン経由で、アイテムボックスの中身を自在に取り出せるようになった。

倉庫の中身をすべて収め終わると、ギルドから箆はらを借りてきて、部屋をできるだけきれいに掃き清める。

こうして、わたしの初仕事は完了した。

資金ができたところで、ポーション作りを始めたが、すぐに壁にぶち当たった。

火の確保ができないのだ。

「部屋でポーションを作る？ まったく、無能な番は」

侍女長に相談したら、思い切り鼻で笑われた。

火を使わずにポーションを作る方法……どうすればいい？

魔法を使う、というところまではわかる。問題はどんな魔法を使うかだ。

わたしはひたすら考えた。前にいた世界の生活、そこで使っていた道具を頭の中で並べていく。

I H調理器。確かコイルが……鍋を直接温める仕組みだ。そう、直接温めるのよね。

部屋に戻り、錬金釜を「直接、温める」ことだけを念じ続ける。

温める、温める、温める……

ふつとなにかが錬金釜に張り付いた。できた！ 新しい魔法！

庭で摘んだ薬草を入れ、煮立ったところで木の棒でかき混ぜる。

「よく効く薬になーれ。よく効く薬になーれ」

アイテムボックスから取り出した薬瓶はピカピカの新品になっていた。

ふと、気づいた。

ほつれていたはずのワンピースの裾を思い出す。

もしかして——ほつれが直るのではなく、新品に戻るといふこと？

靴だって、傷がなくなっていた。古着もきれいになった。あれは汚れが落ちただけだと思っていたけど、新品になっていたのだ。

なるほど。アイテムボックスは修繕する能力ではなく、物の時間を巻き戻す能力なのか。

考えてみれば、魔石の魔力は満タンに戻る。食べ物も腐らない。武器の傷も消える。全部、「元の状態に戻る」という働きだったのだ。

……これは、隠しておいた方がいいかもしれない。

できあがったポーションを一本ずつ、おたまと漏斗ふんとうで丁寧に詰めていく。地道だけれど、嫌いやない作業だ。

ギルド用には魔力をほどほどに込めて作り、自家用には思い切り込めたものも別に作っておいた。使う日が来ないことを祈りながら。

さて、こちらの世界にも慣れたし、お金も貯まった。

明日、わたしはここを出ていく。



わたしは王都の冒険者ギルドで受付をしている。名前はマギー。長くここに座っていると、人の出入りだけでなく、気配の歪みゆがみのようなものが見えてくる。

サミーを初めて見たとき、理由わけありだとすぐにわかった。たぶん、他の冒険者も同じだったと思う。

無自覚だろうけど普通じゃないと、全身が物語っている。

装備は簡素……というか武器を持ってない。歩き方は落ち着いていて、視線は低く、目立たないように意識しているのがわかる。わかる時点で目立っている。

でも、それだけじゃない。あの子は、普通の初心者じゃない。

理由は説明できないけれど、大事に守らなければいけない子だと直感した。いや、守らないとまずいことになる、防衛本能が働いた。

今日も、掲示板の前でうろついていた若い冒険者が、緊張した様子でサミーに近づいていく。

「サミーさん、一緒に依頼どうですか？ 俺たちと一緒になら、楽ですよ」

聞こえた瞬間、わたしは立ち上がった。

「ちょっと、あなた」

声を張ると、ギルド内が一瞬静まり返る。

「初心者を誘うときは、ギルドの許可が必要って規則、知らないわけじゃないでしょう？」

男は肩をすくめる。

「そうしようと思ってるけど、ちょっと先に声を」

「だめよ」

わたしはカウンターを指で叩く。

「登録して間もない冒険者を、個別に誘う行為は禁止」

サミーはわたしに怒鳴られている男を、ちょっと気の毒そうに見て、それからわたしにも無言で会釈すると出て行った。

わたしは男たちを改めて見直す。

「最近、規則違反が目立ってきてるから、はっきり言っとくけど」

睨みつけながら続ける。

「上品で可愛いからって理由で誘うのも、完全にアウト。仕事をしに来てるの。遊びじゃない」

男は舌打ちしてわたしを睨み返す。

冒険者たちが「ああまたマギーの説教が始まった」という顔をしているのも知っている。

がみがみうるさい受付で結構。言われ慣れている。

わたしはため息をついて、椅子に座り直した。

今日も、明日も、規則を最大限に振りかざす。がみがみおばさんと呼ばれようと構わない。

王都のギルドでわたしが受付をしている限り、サミーを雑に扱わせるつもりはないのだから。

朝、リリーが持ってきた食事を済ませて、忘れものがないか確認する。

部屋は最初の日と同じ状態でなにも持ち出さない。

鏡に映ったわたしは、ズボン姿で男の子に見える。

肩掛けカバンを斜めにつけ、リュックを背負うと、部屋をもう一度見回してからドアを閉めた。

いつものように扉の隙間から外に出て、今日は髪を売りに行く。髪をばっさり切ってもらい軽くなつた頭に気持ちまではずんだ。

食べ物と飲み物を買って、予約していた馬車に乗りこむ。

目的地は賑やかだと聞いた隣国の町だ。行き来は自由だという。

王都の門を出ると、馬車はひた走る。わたしは窓の外の景色を楽しんだ。

そうしていると、同乗している客のひとりに声をかけられた。

「おい、坊主。どこまで行くんだ？」

「坊主じゃないよ。ちゃんと名前がある」

「はは、そうか。名前はなんて言うんだ？」

人が良さそうな男だ。

「サミー」と答えた。

本名の塚本雅美から取ったあだ名で、子供の頃からそう呼ばれてきた。ギルドでもこの名前で登録しているし、この世界ではこれでいこうと思っている。

「サミーか。俺はカイル。よろしくな」

なぜか、何気ない言葉が嬉しかった。

「カイルさんはどこまで行くんですか？」

「おれは、リーフタウンだ」

「わたしは、ジップシテイ」

「なるほど、あたらしい町か」

「はい」

それからは、カイルのお喋りに他の客も加わって車内は一気に賑やかになった。

「そう言えば、番のことは聞いたかい？」

「うん、あの店のことかい」

「ああ、気合いを入れて食べに行ったんだよ」

「そうかい、どうだった？」

「冷たくて、美味しかった。果物を凍らせて削削ったものだった」

「凍らせたってことは、番さんの力か？」

「そうなんだろうな。いいよなあ、番さん」

「羨ましい。番を持てたら、大事にするんだけどな」

カイルさんが、なぜだか、得意そうに頷いている。

わたしは窓の外に目を向けながら、ひとりで白けていた。

番を大事にするって、なにも知らない人の意見よ。公爵家も神殿も嘘ついてるんだから。声を大にして言いたいところだが、黙っておいた。

翌日、馬車から降りることもなく、国境をあっさり越えた。ここからはルミナス王国だ。

さすがのカイルも、しばらく口を閉じていた。そのカイルが、ふと小声でこう言った。

「サミー、おまえはどう見ても弱っつい。だから奴隷を買うといい。そいつが守ってくれる」

「奴隷？」

「ああ、強いやつは高いが命には代えられないからな。まあ安いやつでもおまえより強いだろうし、奴隷は命令を守る。命を捨ててもおまえを守ってくれるぞ。次の町で買うといい」

カイルの言葉でこの世界に奴隷がいることを初めて知った。一般的な日本人として生きてきたわたしは正直、奴隷を買うということに抵抗がある。だけどこれから命の危険がある場面は出てくるだろうし、対策は必要だ。

うーん、倫理観とか差別とか……そんなことをぐるぐる考えているうちに、ジップシティに着いた。

「ありがとう、カイルさん。教えてくれて助かった」

「そうか、気をつけてな」

「お元気で」

互いに手を振って別れた。

ジップシティでは、まずギルドへ向かった。ギルド内をぐるりと見渡すと、武器やポーションを売っている。わたしは職員に声をかけた。

「ポーションの買い取りはしますか」

「してるよ。鑑定に合格したらだけどね」

リュックから自作のポーションを五本出して台に載せる。

「これはどうでしょう？」

職員はポーションをひと目見ると、奥へ人を呼びに行った。

「なかなかですね。買い取ります」

あっさり買い取ってくれた。

「他にも作ったら持ってきて下さい。買い取ります」

「はい、そうします……そうだ。宿の紹介はしますか？」

「してないが、飯がうまいのは、黄金亭かな。ギルドを出て右です」

「ありがとう」

ギルドを出て右に少し歩くと、黄金亭はすぐにわかった。

黄金亭に、二日泊まることにして代金を支払い、ついでに奴隷商の場所を聞いてみる。

受付の人はちよっと驚いた顔をしたが、教えてくれた。

奴隷を買うのにまだ抵抗はあるけど、とりあえず行ってみようと思ったのだ。

教えてもらった通り、繁華街のはずれまで来るとお店があった。

中に入ると、執事風の出で立ちの男性が迎えてくれる。

「ここは奴隷商ですが」

「はい、護衛が欲しくて……その、お値段はどれくらいですか？」

「値段は安いものから高いものまでありますよ」

わたしが気後れしているのを見て、店主は穏やかな口調で続けた。

「まずはごらんになってみませんか？ 覚悟が必要ですが」

「はい」

「わかりました。こちらへ」

おどおどしながら店主の後ろについていく。

ドアが二つある。普通のドアと豪華なドア。

店主が開いたのは普通の方だ。

ドアの先はみすぼらしい廊下で、変な臭いがした。

この先に何が待っているように廊下で、変な臭いがした。

突き当たりのドアを開けると、ずらりと部屋が並んでいる。

廊下に面した部分はすべて鉄格子で中が丸見えだ。映画で見る刑務所そのものだった。

「護衛ということですね。奴隷は契約すると主人には逆らいません。いざという時は肉壁になりま

す。ここにいるものはそれ用の奴隷です。だいたい使い捨ては金貨十枚から。優秀な護衛は金貨百枚からです」

「そうですか」と答えながら奥へ進む。無気力な目の奴隷たちを見て、怒りがわいてきた。

わたしも能力がわからないままだったら、あの屋敷であんな目をして朽ちていたかもしれない。

他人事じゃない、そう思った瞬間の怒りだ。

君たち、根性出せよ！

怒りで気が強くなったわたしは、部屋に並ぶ奴隷を見ながら、ためらいなく奥まで歩いていった。

しかし最後の部屋で足が止まった。

「え？」

一人の獣人の男が傷だらけで倒れていた。傷から血が滲み、頭の上の耳がちぎれかけていた。

そんな状態で放置されているのに、目に力がある。

わたしの気配に気づくと、ゆっくりと半身を起こした。銀色の髪は不揃いにカットされ、肩口に

垂れている。

紫色の腫がぎらりと光り、まっすぐわたしを見据えた。

「どうして怪我したままなんですか？」

横に立っている店主に尋ねる。

「こいつは凶暴すぎて何度も返品になったのです。逃げ出してばかりで」

それは怪我を治療しない理由にならない。

扱いが酷すぎる。



アーネスト・ブルーリード——それが私の名だ。

公爵家の跡取りとして生まれ、望むと望まぬとにかかわらず、私は常に「家」を背負って生きてきた。

そんな環境でも子供のころから、番というものに強い憧れを抱いていた。

番は、神に選ばれし唯一の相手。魂たましひが呼び合い、理屈を超えて結ばれる存在だ。

だが周囲は口をそろえて言った。

「番は平民か、せいぜい低位貴族のもとに訪れるものだ。公爵家に番など来ない」

それでも私は信じていた。

番に思いを馳せる時、心に暖かいものが溢れ、愛しさがこみあげてくる。その感覚が、信じる理由だった。

だから、子供のころから神殿で女神様に祈ってきた。

「僕に番をください。大事にします」

だから神殿から「あなたに番が定められました」という連絡を受けたとき、ついに来たと思った。それと同時に夢ではないかという思いも湧いてくる。

だが神殿の印章と正式な書状が、その日が本当に来たのだとはつきり示してくれた。すぐに準備を始めた。

屋敷の一室を整え、母に手伝ってもらいながら身の回りの物や衣装を選んでいく。

番を迎える心構えを屋敷の者に伝え、確認して回った。

番は宝だ。守らねばならない。

浮かれる私に、母は番がもたらすものにも目を向けるように論じた。

そうだ、番を得たものはその能力が上がる。

私はこれまで以上に、公爵家と国のために力を尽くそう。

番はそんなわたしを励まし、寄り添ってくれるだろう。

そんな矢先に、王太子フィルから呼び出された。

間違いなく、厄介ごとだ。

フィルは私より年上だが、幼いころからの付き合いで、気のおけない間柄だ。

そのフィルが、珍しく額に汗を浮かべている。

「アーネスト。クロエの我儘わがままだ」

その名を聞いた瞬間、胸の奥が重く沈んだ。

スミノード大公令嬢クロエ——子どものころから、異様なほど私に執着している女だ。

珍しく私を誘わないで皇国へ行っただと思っていたら、皇国のパーティーでエスコートをしよう伝言してきた。

イースト皇国まで何日かかると思っているのか。神託のことを聞いて邪魔する気なかもしれない。いや、聞いてみようといまいと、クロエは、平気で呼び出すだろう。今回は番のことを盾にフィルの頼みを断った。断ったがフィルの立場もよくわかる。

といえど、クロエの願いを断るのは難しい。

クロエはもともとの性格の厄介さに加えて、この国グリーンバレー王国における魔石の流通の権利を持っているのだ。

こんな契約を結んでいること自体が信じられないが……王家はその契約に逆らえない。

「頼む、アーネスト。番のことは責任を持つ。かならず面倒を見る。だから行ってくれ」

母も少し考えてから、私に言った。

「番はもちろん公爵家で大切にされるわ。あなたは行きなさい。これは公爵家の責務よ。それにあなただの番なら、あなたの立場を理解してくれるはず。行かなかつたら逆に軽蔑されるかもしれないわ」

母の言葉は正しい。私はフィルと母に後を頼み、イースト皇国へ向かった。



「おい、俺を買ってくれ。おまえのように弱そうなやつを守ってやる。俺は強いぞ。おまけに安い」

男は傷だらけなのに、随分威勢がいい。

わたしは店主の方を見て尋ねる。

「彼はいくらですか？」

「金貨三枚。返品は受けつけません」

「奴隷って、その主人には逆らえないんでしょう？」

「逆らえないのは逆らうと苦痛が与えられるからです。それに堪えてでも逆らおうとする者もいます。こいつのように……ですが、こいつほど逆らうやつはあまりいません。逆らったとしても返品はなしです」

男はわたしをまっすぐ見て、しっかりと口調で言った。

「おまえの言うことは聞くぞ」

それから横の犬に目を向けて言った。

「その檻かごに入っている犬も一緒に買ってくれ」

「犬？ ……犬が好きなの？」

店主が顔をしかめて答えた。



犬の状態は酷く、右前足は付け根から、後ろ足も半分ほど失われていた。しばらく様子をみていると「ワオ」と犬が鳴いた。

意識が戻り、出血も止まったようだ。

もう一度ボーシオンを少しずつ口に入れると、今度は飲んでる。

だんだんに力が戻ってきたと思ったら、やがて眠そうになって寝てしまった。

気絶じゃないよね。

体力のない所にこれ以上治療しても辛いだけかもしれない。あとは目が覚めてからだ。

残ったボーシオンを追加で奴隷に飲ませると、見る見る傷が塞がっていく。

なにか言いたそうだったが、奴隷は沈黙を守っていた。

汚れているので洗おうと、水の塊を出す。

「その水で体を洗って。汚れたらまた出すからどんどん使って。犬はわたしが抱いている」

ためらう奴隷から犬を受け取り、以前ぼろで買って新品同然になった服を差し出した。

それがこの奴隷によく似合っている。わたしなんて古着がしっくりきたのに。

なんか、負けた気がする。

宿に戻って受付に尋ねた。

「奴隷を連れてきたんですが、部屋はどうなりますか？」

「床に寝るなら同室でいいです。毛布の分だけ追加料金をいただきます。犬は無料ですよ」

奴隷が抱えている犬を見て、笑いながら言われた。よかった！

部屋に戻ってお風呂にお湯を張ると、ちょうど犬が目を覚ましたところだった。もう一本ボーシオンを飲ませることにして、わたしが仰向けに犬を抱き、奴隷が少しずつ口にいれてやる。

だんだん上手に飲めるようになってきた。

そして――

「ワオ、ワオン、クーン」

元気な声で鳴いた。足も生えてきている。

それを見た奴隷は大声を出しそうになって、自分で口を押さえた。

「ご主人様……ありがとうございます」

搾り出すようにそう言って、わたしの頬を舐めている犬をそつと撫でる。

犬を渡すと、奴隷は犬に頬ずりした。

その目から流れ落ちる涙を犬が舐めている。

わたしは、このボーシオンはさすがに効果がありすぎじゃないかと考えながら、その光景をぼん

やり眺めていた。

しばらくして奴隷は落ち着きを取り戻した。

わたしの前に片膝をついてこう言う。

「わたくしはご主人様に忠誠を誓います。わたくしの命はご主人様のものです。いかようにもお使

い下さい。奴隷としても裏切ることなくお仕えいたします」

犬も横でお座りして頭を下げている。賢い犬だ。

立ち読みサンプル  
はここまで

「わかりました。まあわたしのことはすべて秘密厳守で……それはまあ奴隷だから当然かな。あと、わたしはこの世界のことをあまり知らないから教えてほしいの」

「承知いたしました。奴隷は主人のことはいかなる状況でも口外いたしません」

「あなたの名前は？」

「奴隷に落ちた時に名前は捨てました。ご主人様のお好きなようにお呼び下さい」

「そうなのね。それじゃあ……ドレイ、レイ、レオ——尻切れトンボかな。えーと、レオン。レオンがいいかな。これからはレオンと呼びます。そっこの犬の名前は？」

「これもご主人様のお好きに」

「そうねえ……チャーリーは？」

茶色の犬だから、そのまま名付けた。

「それとわたしのことはサミーと呼んで」

「はい、サミー様」

「じゃあれオン、お風呂に入ってきたきれいになってきて。チャーリーも入る？」

「ワン」

タイミングよく犬が鳴いた。偶然ってすごい。

「サミー様より先などとても」

「かまわない。先にどうぞ」

遠慮するレオンをお風呂に送り出すと、窓の外を眺めた。夕暮れになってむしろ人出が増えてい

る。いい町だ。

お風呂から上がってきたレオンに聞く。

「犬を食堂に連れて行っても大丈夫だと思う？」

「店主のお考え次第かと」

「そうね」

受付で確認すると「おとなしくしてるなら大丈夫」とのことで、チャーリーをリュックに入れて連れていくことにする。

食堂に行くと、隅の席に案内された。

メニューを開き、給仕に今日のおすすめを聞いてみた。

「今日は豚肉の煮込みが美味しいですよ。りんごのソースがいい出来で」

「わたしはそれを。レオンも好きなものをどうぞ」

「いえ、同じものを」

「それじゃあ煮込みをふたつ。あと食後にはなにかある？」

「りんごのコンポートがあります。生クリームを添えてどうぞ」

「レオンは好き？」

「いただきます」

レオンが少し笑って答えた。

「それと犬用のお皿があったら買い取りたいんだけど」